



— チェルノブイリに思いをよせて —

ポレーシェ

菜の花サミット開催！ 総括と今後の課題

(「第17回全国菜の花サミット in 南相馬 2017」実行委員会 事務局長 奥村健郎)



〈メイン会場で堂々と事例発表をする
相馬農業高校の皆さん〉

4月22・23日の両日、南相馬市民文化会館「ゆめはっと」をメイン会場として、「全国菜の花サミット」が日本全国から多くの方の参加をいただき、多彩なプログラムで開催されました。

昨年4月の奈良県での開催以降、南相馬農地再生協議会を中心に準備委員会を立ち上げ、「菜の花は未来をつくる 復興から再生・創造へ」をスローガンとして、同年11月18日に市民団体・行政団体とともに、第1回実行委員会を開催し準備に当たってきました。

福島県南相馬市は、2011年3月11日に発生した東日本大震災による「地震・津波・放射能・風評被害」という、世界にも類を見ない複合的な地域課題を有する被災地です。震災後6年の間に当地域では、市民の自発的・自立的・草の

根的な「市民主導の復興運動」が芽吹き、「相双版菜の花プロジェクト」「農業・畜産の再生」「再生可能エネルギーへの取組み」「市民による放射能防護」など、南相馬の市民活動が歩んだ6年間を全国の仲間と共有し、次世代へとつないでいく契機とすることを、「全国菜の花サミット in 南相馬」の狙いとししました。

また、今サミットのもう一つの目的は、これら市民活動に対する政治・行政・企業・学術団体等からの理解・支援を得るだけでなく、「草の根」から「協働」となることを目指すものです。今回のサミット開催を契機に、市民の連帯による運動が、「菜の花プロジェクト相双」として市の行政単位を超えて、広く相双地区や福島県内、全国被災地へ復興の希望を波及させていくことを期待いたします。(P2・P6・P7・P8も参照してください。)

〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 STプラザ鶴舞5階B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱東京UFJ銀行 高畑支店(店番号297)

口座番号：普通 1682863

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

★半年間準備を重ねた「第 17 回全国菜の花サミット in 南相馬」が、4/22・23 に開催されました。第 1 日目 南相馬市民会館「ゆめはっと」には、約 450 名（県外から約 150 名）が参加し、相馬農業高校生を始めとする 6 組による「トークでつなぐ事例報告」があり、「チェルノブイリからフクシマへ～菜の花が未来をひらく～」の記念トークでは、桜井市長が熱く思いを語り、ウクライナの歌姫「ナターシャ・グジー」コンサートでは、美しく心のこもった歌声に感動しました。最後に、南相馬市小高地区在住の小林友子さんが、

- ① 3.11 災禍から立ち直り、「地域再生と創造」に向けて取り組む
- ② 「地元の知恵と力」から始まる地域再生に取り組む
- ③ 原発に頼らず、「自然と共生する資源循環型の地域モデル」を創造する。

という「サミット宣言」を読み上げ、満場の拍手で採択されて、全体会を終了しました。

夜の交流会は、野馬追祭り螺役（かいはく）の法螺貝の響きで開始され、170 名の大盛況の中、楽しく歓談・交流し、来年のサミット開催は「熊本県南阿蘇町」と宣言されました。

2 日目は、分科会です。

第 1 分科会「原子力災害からの農業再生～食農の安全・安心～」約 80 名（立席が出ました）

第 2 分科会「脱原発社会へ～エネルギーと暮らしの地域自立～」約 60 名

第 3 分科会「放射能との向き合い方～被災地で生きるために～」約 70 名

第 4 分科会「食べて学ぼうヴァージンオイルの世界～全国なたねの競演～」約 40 名

…と、予想以上の参加者で、どの会場も椅子を急遽追加する盛況ぶりでした。各分科会では多くの発言があり、時間制約の中、菜種栽培の有効性を共有することができました。

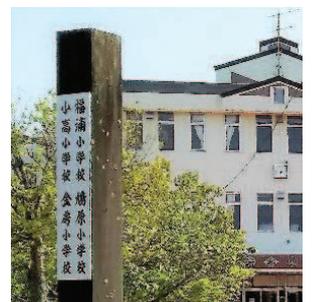
昼前に出発したエクスカーション（菜の花畑探訪と津波・原子力被災地の現状視察）も、100 名強の参加者があり、満開近い菜の花畑を堪能し、小高区内を中心に被災地の現状もご覧いただき、15 時前には JR「原ノ町駅」前で全てを終了し、解散しました。

今回サミットを開催するに当たり、南相馬市内の主だった団体で実行委員会を結成し、69 の会社・団体から協賛金をいただき、本サミットが無事開催できました。多くの皆様方に支えられサミットを終了できたことに、心からお礼申し上げます。

★第 13 期放射線測定活動は、サミット開催の為、4/1,2・4/8,9 と例年より 2 週間早く実施しました。年度初めの為、地元ボランティアの募集は厳しかったのですが、幸い天気にも恵まれ、無事事故なく終了しました。サミット終了後、残りの浪江町内の測定も終わり、6 月初めにはマップ化され公表予定です。第 3 回目の富岡町測定も、5/20 に地元の町民とともに「とどけ鳥」からも協力参加し、終了しました。チェル救の厳しい財政事情はありますが、今回の参加者からも継続の必要性などが強く語られ、今後の測定へ大きな励みとなりました。測定時に採取した土壌の測定活動も終了し、マップの発表に合わせて土壌測定結果も公表していく予定です。

★今年 4 月、小高区内で再開した小高・鳩原・金房・福浦の 4 小学校は、4/20 小高小学校で運動会を 7 年ぶりに開きました（4 小学校は合同で小高小学校に通学中）。運動場は全面に人工芝が敷かれており、相馬野馬追を模した「神旗争奪戦」も行われました。4 校の全児童 62 名の内、家族共々小高区内に帰還したのは約 3 分の 1 で、残りは原町区、鹿島区内で避難生活を続けながら、バスで通学をしているのが現状です。3 月末、4 月初めと多くの市町村で避難地域の解除が行われましたが、浪江町と富岡町の測定時に見た町内では、ほとんど住民の姿を見かけることがなく、厳しい現状が続いていました。

一方で、県外・県内避難者への支援は切り捨てがどんどん進行し、国・東電は責任を顧みず、避難者の「自己責任論」に押し込めようとする政策を断じて許すことはできません。帰還判断の可否に係らず、避難者の生活保障を継続する国・行政の政策執行を、強く迫らなければなりません。



<通常総会とチェル救デーのご案内>

- 日時 2017年6月10日(土)
13時30分 ~ 16時30分
- 場所 イーブルなごや(名古屋市女性会館)
第1研修室
(地下鉄 名城線「東別院」下車①番出口から東へ
徒歩3分)
- 参加費 300円/人

<2017年度通常総会>

13:30~14:30

<チェル救デー>

14:45~16:30

- 菜の花サミット報告
- 白髭幸雄さんのお話
- 交流会



「チェル救って、油菜ちゃんが売れて儲かっているんじゃない?」「助成金をもらって資金足りてそうだよ」と思っている支援者の方はいらっしゃいませんか?

チェル救の財政難はますます深刻化し、予算立てもままならない状況です。

財政難の原因第1位は「寄付金減少」。新しい支援者を増やすことが最重要課題です。そんなこともお伝えしながら、今年の「チェル救デー」は、南相馬市在住の白髭幸雄さんをゲストにお迎えして、楽しくかつ真剣に、チェル救の今後や福島の未来を語りたいと思います。会員でも会員でなくても、ぜひぜひお越しください。

<チェル救デーでお話したいこと>

南相馬市在住の白髭幸雄(しらひげゆきお)と申します。1950年生れですが、まだ会社勤めをしています。

私が、「測定センター(とどけ鳥)」とどのようにして出会ったのか、今となってはよく覚えていませんが、「いつの間にか仲間然として、懇親会に顔を出していた」というような、厚かましい人間です。しかし、年2回の(空間線量の)モニタリング活動は、私にとって生きがいとなっています。

「チェル救デーの講演内容を…」という依頼を受けましたが、私は講演などとてもできません。また、測定以外でチェル救の方と交流するのは、懇親会を除いては初めてで、とても戸惑いましたが、「体験発表なら…」ということで、お引き受けしました。

私は35年間、原発で働いてきました。また、事故当日も1F(福一)にいました。私の、放射線に対する感覚や、原発に対する態度も、この35年間の体験に根ざしています。したがって、発表の内容は、事故前と事故後が如何に異なっているか、そうした体験についてお話しすることになると思います。

私は事故前、定年が近いこともあり、仕事よりも地域活動に力を入れていました。それは、「ホテルの里づくり」を通して、「まちづくり」を目指すというものでした。地域の方々と、ホテル調査をしてマップを作ったり、小学4年生を対象に「水生生物調査」を企画したりする活動でした。原発事故は、私からそれらを奪いました。事故前は「ホテルマップ」を作成していましたが、事故後は「線量マップ」を作成するようになりました。みんなが、安心して「ホテルマップ」を作れるような日がくるまで、「線量マップ」を作り続けることが、事故を起こした世代の責任だと強く感じています。

2017年5月23日 白髭 幸雄



<とどけ鳥一周年記念講演会後の懇親会にて
後列左から3人目が白髭さん(2013.6.15)>

福島原発事故から6年経った今、被災者は今大きな岐路に立たされている。今年3月末、政府は年間20mSv以上の帰還困難区域を除き、多くの被災地の規制を解除し、帰還を強制する措置をとった。法的には依然として「緊急事態」のままである。対外的には問題が解決したかのように見せかけ、2年後のオリンピックに備えようとしている。こうしたやり方は、日本の原発政策の特徴でもある。そもそも、「原発は大事故に備え、人口密集地域に作ってはならない」とする「原子炉立地審査指針」があって、過疎地に作られるようになったものである。大事故は起こらないと言いながら、いざ事故が起こると責任を取らないこの国の政治は何なのか。

チェルノブイリ法とは

歴史上初めての大惨事だったチェルノブイリ原発事故は、人類の放射能の利用に伴う被曝の影響について、厳しく問われるものであった。勿論、それ以前にも冷戦中の核実験による間接的な被曝はあったが、住民の直接的な被曝を伴う原発事故は、住民の安全と健康を如何にして守るかが厳しく問われたのだった。事故直後は、一般的な放射線防護の被曝基準を守れるはずもなく、旧ソ連政府の対応も右往左往の状態だった。しかし、事故から5年が経過し、住民や事故処理作業員の被曝による影響に対して、本格的な対処を目的に作られたのが、いわゆる「チェルノブイリ法」である。その最大の特徴は、「国家に責任がある」という規定である。その結果、汚染地域住民や事故処理作業員の被曝とそれに対する対策が明確に規定され、国の責任で実施されることになった。具体的には、年間5mSv以上の地域は居住禁止とし、1~5mSvの住民には移住の権利を認め、0.5~1mSvの住民にも無償の健康診断を義務付けた。被災者には、公共交通や医療費の無償化、保養の権利を認めた。移住者には家屋を提供し、雇用も紹介した。こうした対策には膨大な費用が掛かる為、消費税として8%の「チェルノブイリ税」を課し、被災者のために使った。

緊急事態中の日本は避難解除

それに引き換え、福島原発事故に対し、日本政府は責任を回避し、本当に必要な対策を取ろうとしない。事故から6年経過した今も、法的には「緊急事態」継続中である。安倍首相の「アンダーコントロール」発言は、嘘偽りである。放射能の影響を直視しないのが、この国の政策である。その結果、増加しつつある小児甲状腺がんも、原発事故の影響ではないと強弁し、年間20mSv以下の地域の規制を解除して、移住者の帰還を強制した。そもそも、年間20mSvは原発労働者の基準（5年間で100mSv以下）であって、これ以下でも、原発敷地内では防護服を着用し飲食は禁止である。そんな環境の中で、住民には生活や子育てを強いるのは違法である。「緊急事態」の継続中だからという言い訳は通用しない。

事実を直視しよう

一方、事故から6年が経過し、被曝状況は地域により大きく違ってきた。南相馬市の居住区域は年間1mSv以下が85%を占めるまで低下した。作物の汚染も大幅に低下した。今、100Bq/Kgの食品基準が風評被害を生んでいる。あくまでも現実を直視し、それに対応する政策を進めなければならない。事実の過小評価も過大評価も良くない。

(2017年5月25日 河田)



「淡いピンクの桜、高い山々と未開の自然の国を知ってください」

「チェルノブイリの人質たち」基金理事 イェヴゲーニヤ・ドンチェヴァ

14 歳のオレク
サンドル・アラポ
ウは、「ウクライナ

ー日本の文化交流」コンクールに提出したエッセイの中で、このように書いています。

4 年前、私たちは東京の CheFuKo 基金と知り合いました。この基金と私たちの基金とを結びつける主なコンセプトは、全世界の子ども達の未来について考えながら、彼らの願いと希望をよみがえらせようと努力することです。特に、(ウクライナではチェルノブイリ、日本では福島の)人災によって被害を受けた子ども達の…。

この目的で、私たちは共同のコンクールを企画しました。ウクライナの子ども達が、日本の子ども達の生活について知り、友好関係を結ぶことによって、さまざまな分野での実り多い共同作業が実現できるように…。

コンクールの最終入賞者(3名)は、「ウクライナー日本文化交流」のプロジェクトに参加するため、日本に招待されます。この日本滞在には、福島県での子ども達のキャンプへの参加、成田市と浅草での見学が含まれます。

コンクールへの参加を希望した子ども達は、「なぜ、私は日本に行きたいか」、「チャリティーは自分の家から始まる」という2つのテーマのエッセイを書き、「日本は日の出づる国」というポスターを描きました。以下に、子ども達のエッセイをいくつか引用してみましょう。

「日本は大きな可能性を持った国です。」

カテルィナ・ボップ、14 歳

「私は日本の文化を知りたいです。日本の人たちがしているように、自分が幸せになる助けになることをするにはどうしたらよいのかを…。」

ヴァーリヤ・ルサク、14 歳

「日本は東洋の国で、高度に発展しており、豊かな文化を持っています。私は、自分の内なる世界を楽しませ、発達させ、豊かにするためにそれを知りたいです。」

ハンナ・ルキヤンチュク、14 歳

「誰かがチャリティーの行為を自分の生活の一部

とし、本当に困っている人たちを助けるなら、世界は生きていくためのよりよい場所になるでしょう。」

デニス・マイストルーク、14 歳

ほかに日本とウクライナとを結びつけるものは何でしょう？ ジトーミル州立児童図書館での日本のアニメの展覧会のオープニングで、私たちは、この問いに対する答えを提示しようとしました。

【Anime World. We are all in love with it】

(「アニメの世界 私たちはアニメが大好き」)

と題した展覧会は、日本文化の一側面をテーマとしたものです。この展覧会では、ウクライナと日本の子ども達に参加が呼びかけられました。新潟県の三島中学校の生徒たちは、アニメ・スタイルの絵を出品しましたし、私たちの長年のパートナーである「チェルノブイリ救援・中部」からは、あべひろみさんのポスターとマンガの本が送られてきました。これもまた、私たちの国の間での独特な文化交流となりました。

「ジトーミルで、これからもこんな面白い文化交流の展覧会が行われることを期待しています」と、スタジオ「若いデザイナー」の代表者カテルィナ・ダツュークは言いました。このスタジオで勉強している子ども達が、展覧会に積極的に参加したのです。

ジトーミルは、日本の美しい樹木である桜の「植樹セレモニー」が公式に行われた、最初の町の一つになりました。チェルノブイリ原発事故の日である4月26日に先立ち、在ウクライナ日本国特命全権大使、角 茂樹氏は、夫人を伴って、ムィハイリウシクィイ歩行者道での11本の桜の植樹に参加しました。「私は、町の未来に対する今日の貢献について、すべての方々が記憶され、また桜の花が咲く春、日本人がしているように、皆さんがその美しさを楽しまれることを願っています」と大使は述べました。

桜はウクライナの黒土に根付きました。それと同じように、ウクライナと日本の協力も、一般の人々に支持されて発展しているのです。桜が、ウクライナでも花を咲かせますように！

◆分科会2 / に参加して

(愛知県被災者支援センターボランティア 瀧川裕康)

脱原発社会へ（エネルギーと暮らしの地域自立）について

1 この分科会を選んだ理由

チェルノブイリ・福島などの原発の重大事故以来、脱原発・自然エネルギー・避難・健康・放射線の主張の違い・子ども被災者支援法・農業の再生など、様々な主張がある中、「私たちは今後どのような社会の在り方を望むのか？」という問いに答えねばなりません。そのための大きなきっかけになると判断して、この分科会を選びました。直前に、河合弘之弁護士・監督作成の映画『日本と再生』を見ていたことが、私にこの分科会への参加を促進させました。世界では、すでに日本の東芝・アメリカのWH社・フランスのアレバなど、大きな原発関連会社が倒産の危機にあり、原発関連産業は衰退の一途を辿って、国の経済破たんの原因ともなる反面、自然エネルギーは主流となりつつあります。1995年阪神大震災や2011年東日本大震災後に、被災者から「生き方を変えるべき、おごった生き方への反省」と言われてきたことがいよいよ現実となってきたようです。

2 再稼働

世界で閉鎖された原発の平均稼働年数は24.7年です。今、日本では40年に加えて20年間も動かそうとしているのですから、再稼働により必ずまた大事故を引き起こし、住民の生活を奪います。かつて水俣病（公害）でもそうであったように、被災者は、その実態が隠され、十分な治療や生活支援が受けられないまま現在に至っています。原発事故も同じ経過を辿っています。奪われた暮らしは、簡単に取り戻すことができません。

3 自然エネルギーの役割

中山間地での住民の創意（総意）に基づいて進んでいることに、大きな魅力があります。地域に必要なだけのエネルギーを地域で獲得し、その経済活動によりその地域で利益を獲得できる、それが現在世界で進められている自然エネルギーの、活発な目を見張る本物の民主主義を取り戻すことができる、一つのツールでもあります。自然エネルギー発電の開発は、そこに暮らす人々の生活に

根差した経済を作り出す、まさにこれぞ「民主主義」の直感がします。そして、今回その報告者に南相馬市や福島県の役所が関わっていることに、魅力を感じました。その担当者は、高橋 莊平さん（えこえね南相馬研究機構）、佐々木健洋さん（福島県農民連）のお二人です。素敵な実践の報告でした。



4 「フェアトレード」

1970年代の「石油ショック」以来言われてきた、「地産地消」や「フェアトレード」の合言葉が自然エネルギーに同じコメントの意味が含まれています。

途上国の安い賃金・安い資源など、弱いものからの搾取が前提のグローバル経済の考え方への疑問と、その反対にある保護主義にも疑問がある中、そのどちらでもない「フェアトレード」という考え方に、あるべき社会の在り方として賛同できます。自然エネルギー発電には、その可能性がすぐ身近な地域で実践できます。

5 「地産地消」

「大きいことはいいことだ」と声高にテレビの宣伝に使われていたことが、「石油ショック」の時に否定されました。それに変わる合言葉の一つが「地産地消」です。日本では、化石燃料の確保のために、膨大なお金（約20兆円）が海外に支払われています。それが原因で、かつての「石油ショック」も引き起こしました。そして、その利益は大きな会社に回り、地域には残りません。仕事も残りかすしかありません。しかし、地域に必要なだけのエネルギーを作るということは、その地域の会社が、資源供給者・エネルギー生産者・メンテナンス業者・融資先の地方銀行となれば、この地域でお金を回せるではありませんか。「顔の見える関係」の住民が「地産地消」を実践できます。これが目指す社会の一つであっても良いでしょう。

〈「菜の花」は、この地の大きな希望！〉 (福島県立相馬農業高等学校 加藤 貢壽)

2012年10月より農地再生協議会の方々と開始した、農地再生復興事業「菜の花」栽培も、今年で5年目となりました。その間に、「菜種油からはセシウムが検出されない」という小さな光を頼りに、2年目には、菜種を焙煎せず生搾りにこだわって製造した菜種油「油菜ちゃん」の開発・商品化をすることができました。

以降、「油菜ちゃん」の姉妹商品として「油菜ちゃんマヨネーズ」を開発・販売しました。また、昨年度には、本校の食品科学科の生徒たちが、30種類以上の試作と試食を繰り返してレシピを作成した「油菜ちゃんドレッシング」も、県内企業の(株)内池醸造への委託製造によって商品化され、農地再生協議会を販売元として発売されました。このような活動を通して、東日本大震災と福島第一原発の爆発事故で壊滅的な被害を受けた、我が「南相馬市」の農地再生・菜種の栽培は、順調に進んできました。まさに、「菜の花」はこの地の大きな希望となりました。

今年度は、チェルノブイリの高校生2名が本校を訪問して、本校農業クラブの役員たちと交流を深めるというイベントも開催できました。また、「全国菜の花サミット2017 in 南相馬」においては、これまでの活動結果を発表する場を与えていただき、「油菜ちゃん」と関連商品の販売もさせていただきました。



〈南相馬に搾油所を！
郡山北ライオンズクラブの
資金助成により購入された搾油機〉

今回の菜の花サミットに参加することにより、生徒たちは充実感と達成感を味わうことができ、今後の活動にもさらに意欲をもつことができたと思います。また、今まで農地再生協議会と本校で、協力しながら企画していた『南相馬に搾油所を』という活動に、国や県も搾油所建設に向けて経済的・人的支援を発表しました。郡山北ライオンズクラブが資金の助成を行い、国立福島大学による「2年後の農学部開校に向けて、大学生の講座を開きたい」という申し出が、新聞報道されました。末尾になりましたが、全国菜の花サミットに参加させていただきまして、誠にありがとうございました。

〈地域を作っていくのは、そこに住んでいる人であり、 地域の歴史や文化を誇りに思う郷土愛〉 (織田 由紀子)

今回、はじめて南相馬で開かれた「全国菜の花サミット」に参加してみようと思った理由は、二つあります。一つは人のつながりです。以前、「環境とジェンダー」というプロジェクトで、菜の花プロジェクトネットワーク代表の藤井さんのお話を伺い、「菜の花自立曼荼羅」とその活動に興味を持ったこと、加えて太谷さんともつながりがありました。第二は、開催地が南相馬市だということです。九州に住んでいることもあり、これまで福島県にはあまりご縁がなく、浜通り地域には行ったことがありませんでした。「地震・津波・原発の被害を受けた地域は、今どうなっているのだろうか」「菜の花は、その復興にどのような力になっているのだろうか」という関心からの参加でした。

参加して強く印象づけられたのは、地域の住民の皆様が、人的・自然的災難に打ちのめされながらも立ち上がり、新しい地域をつくるための努力を積み重ねていらっしゃる事です。単に元に戻るのではなく、「辛い経験ではあるが、これをもとに新しい社会の方向を打ち出そう」という、前向きな姿勢が、桜井市長・高校生・保健の専門職の方・行政・大学などの事例報告やお話から、うかがえました。そして、地域を作っていくのはそこに住んでいる人であり、地域の歴史や文化を誇りに思う郷土愛なのだということを、改めて実感しました。これは、大都市にはない地



域社会の強みだと思います。同時に、現在の制度や行政システムが、新しい社会作りの妨げになっていることも、垣間見えました。

ナターシャさんの心に響く歌声、子ども達の美しい合唱、相馬野馬追を想起させる法螺貝で始まった歓迎交流会と美味しいお料理の数々、そこでの新しい出会いなど、印象的なことは他にもたくさんありますが、菜の花を忘れることはできません。食とエネルギーという、私たちが生きていく上で欠かせないものを代表するものとして、菜の花を地域おこしの軸に置くのは、ほんとうに素晴らしいと同感しました。エクスカージョンで訪れた菜の花畑の写真は、今、私のコンピュータの待ち受け画面になっています。菜の花の黄色は気分を明るくしてくれます。

<原発事故は不可抗力ではなかった>

(倉田 節子)

あの9・11の時、私は娘達と研修旅行で、ある高原のペンションに居ました。夜遅くまでオーナーのおじさんと話していた時入って来たニュースに、とんでもない時代の始まりを感じました。それから10年、3・11の時、国会中継を観ていました。予算委員会室のシャンデリアが大きく揺れて室内は騒然となり、やがてカメラは東北に移りました。

どうしてここで9・11から話が始まるのかですが、やっぱりそうしたいと思います。私達は不可抗力という言葉を持っています。9・11は不可抗力だったのか、私は決してそうだとは思っていません。では3・11はどうなのでしょう。マグニチュード9を超える巨大地震そのものは、不可抗力だったと素直に思いたいです。でも日本列島が地球のどの位置に存在し、地球の構造も研究され尽くし、海からのプレートが大陸からのプレートの下にもぐり込んでとか、巨大地震が起こる可能性は100%だったと思います。その可能性を無視し、この国の海岸線にはいくつもの原発が立ち並んでいます。原発事故は不可抗力ではなかった、決してそうではなかったはずです。原発=核との共存なんてありえないはずです。

今回の菜の花サミットへの参加は、サミットそのものへの参加が初めてでしたが、会場が南相馬ということで、チラシを観てすぐ参加を決めました。ずっと行かなければと思い続けてやっと叶いました。原富男さんのBDFで走る車に同乗させていただいて...遠かったです。自分の頭がこんなに重かったのかと思い知らされました。帰ってからはしばらく首が痛かったのです。

さて、会場が南相馬、チラシの呼びかけは「菜の花は未来をつくる、復興から再生・創造へ」。記念トークは、「チェルノブイリからフクシマへ～菜の花が拓く未来～」ということだったので、どれだけ原発問題が前面に出され、菜の花が問題にどう関わって未来を信じられるものにするのか、もっと強烈に伝わって来るのかなと期待したのですが、何かうすぼんやりでしたね。

分科会は「④食べて学ぼうバージンオイルの世界」に参加、食いしん坊だから選んだのですが、福島で生まれたバージンオイルについて、もっと語られたらいいと思いました。日本各地のオイルが並べられ、食べ比べというより舐め比べをしましたが...福島で何故バージンオイルなのか、そのことに重点を置いて学びたかったと思いました。

番外の早朝ドライブを原さんが提案してくれて、郊外の牧場（牛は一頭も見えなかった）や、線量の高い、今は子ども達の居ない小学校、防波堤建設現場など観て回ることができ、このドライブが最も心に残っています。

<学んで感じたことを、周囲の人に語ることから始めたい！>

(小島 綾華)

このたび、南相馬市で開催された菜の花サミットに、ボランティアそして一人の学生という気持ちで参加しました。ここでは、「菜の花は未来をつくる 復興から再生・創造へ」というテーマのもと、事例報告会や菜の花畑探訪などを通して現地の現状、農地再生のための取り組みについて考える機会をいただきました。



かねてから、油菜ちゃんの商品に関心を持っており、同じ学生としての立場である私にとって、相馬農業高等学校の生徒による報告は、地域における食とエネルギーの地域自立の重要性を改めて認識させてくれるものでした。同時に、自らが地元のためにと主体的に活動する勇気をいただきました。また、農地再生に取り組んでいる報告者の方の「地域内の環境と経済の好循環を持続させていかなければならない」という言葉に、私自身も自分たちの社会は自分たちでつくっていかなければならないと痛感しました。

私たちは、新聞やテレビなどのメディアを通じてではなく、経験者のお話、そして実際に現地へ訪れることで、再認識することが多くあります。自分の目で見て感じたこと、聞いたことを周囲の人に伝えることは、同じ社会に住む人々に理解を繋げることができます。

菜の花のもつ魅力とその利用方法は、人々に知ってもらえるようになってきております。さらにこれを地域づくりにつなげるためには、やはり人の力が求められると感じました。私はこの活動を、そして今回学んで感じたことを、まずは周囲の人に語ることから始めたいと思っています。

「知る」ことにより、地域に暮らす人々の想いに少しでも寄り添い、そしてまだ知らない人に「発信」することで、地域活性化のための協力の輪を広げていくことができるはずです。

今回の現地訪問を通じて得た見聞は、皆が互いに補完し、協力し合い、前に進んでゆく強さとともに、明るく広大に咲く菜の花を思い出すことでしょう。菜の花サミットで、多くの素敵なお方に出会えたことに感謝の気持ちでいっぱいです。関わっている仲間の一人でいられる事に、幸せを感じます。ありがとうございました。

第13期(第26&27次) 測定隊が行く!!

<三度目の正直>

(迫田 朋子)

河田昌東先生に、「地域ミーティング～放射能汚染からの農業再生～」という番組(2012年3月10日放送。詳細は以下のHP参照 http://www.nhk.or.jp/ashita/support/meeting/20120310_fukushima/index.html)にご出演いただいてから、ずっと測定に参加したいと思っていました。放射線量率マップも、放送で紹介しています。定年退職直前にやっと休みが取れたと思った昨年春は、熊本地震が起こり、南相馬まで来ていたのに一日だけでとんぼ返り。秋は、直前に私が尾瀬の木道で転倒し骨折、入院手術という羽目になり参加を断念。今回が三度目の正直でした。想像していた以上に、学ぶことが多かったです。いろいろ教えてくださった地元の方の力が大きかったと思います。ありがとうございました。

私の担当は、浪江の帰還困難区域と南相馬市小高区でした。人の姿がまったくない浪江の津島地区。4月初めなのに直前に降った雪が積もっていて、とてつもなく美しかった。数値は軽く0.3を超え、シーンと静まりかえったなかで、測定器の警報音が響いていました。そのなかにも、ホットスポットらしき場所もありました。目に見えない放射能の恐ろしさを実感しました。「多くのひとが、何も知らされないままひと月もこのなかに避難していた」という事実を、どう考えればよいのか。浪江の人たちから聞いていたいろいろな話を思い出しました。そして測定を続けてゆくことの大切さを認識しました。それにしても、今も積みあがってゆく黒のフレコンバッグの山を、どうとらえたらよいのでしょうか。人々の気持ちを萎えさせます。今更そんなことを言っても…と思いつつ、もっと知恵を集めて別の方法があったはずなのに、と思わざるをえませんでした。そして、人々の豊かな暮らしを奪った原発災害への憤りを、新たにしました。

解けない問題を目の前にして言葉を失いつつ、でも菜の花や常磐線の浪江までの開通や、そこで仕事を再開した人たちの姿に逆に励まされた、とても濃厚な時間でした。



<左から2人目が田中さん、4人目が迫田さん>

<現地を自分の目で見る事が重要！>

(愛知県 田中 英二)

2011年3月11日の東日本大地震。それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故。私は大学3年間を東北で過ごしたこともあって、これにはとても強い衝撃を受けた。愛知の高校では、このとき、ほとんどの学校にガイガーカウンターが1台もない状態であった。日本全国には54基もの原発が存在していても、このときまで日本で重大な原発事故が起こるとは、教育現場も行政もだれも考えていなかった。1979年スリーマイル原発事故、1986年チェルノブイリ原発事故と、2度も世界で大きな原発事故が起きているにもかかわらずである。2013年1月から、遅ればせながら私は自分でガイガー計数計をつくろうと思い立ち、2015年1月に約30人の仲間と製作し、2016年10月これを改良してSDカード記録ができるようにした。そんなとき、富田さんから南相馬放射線測定隊の話聞いた。

測定に参加して、宿泊したのは小高駅のすぐ近くの旅館である。南相馬に到着した日が3月31日(金)。次の4月1日に浪江町の一部が解除され、小高駅から浪江駅まで列車が走るといので、早起きして6時の始発で小高駅から浪江駅までいった。浪江駅には、報道陣と私たちのような人間だけがいた。4月2日、3日の午前中は、現地のボランティアの人たちと一緒に、携帯用の放



<南相馬市消防・防災センター
1階の展示室にて>

射線量計を使って、それぞれ地図上で500m四方に区切られた指定の場所の放射線量測定をした。おおむね原ノ町の街中は0.1~0.2 μ Sv/hの範囲で、除染が行き届いていた。しかし、林の中や水たまり、道路の土手などは、0.3~0.5 μ Sv/hほどあるところもあった。午後はいろいろなところを見学した。

菜の花プロジェクトの畑や、浪江の海岸にある津波で壊れた小学校、その近くの道路の横ズレ断層などなど。放射線測定も勉強になったが、午後、見学したいいろいろなところがとても勉強になった。何より、現地を自分の目で見る事が重要だと思った。また機会があったら参加したいと思っている。

<避難指示解除された町・・・街灯や信号機の明りだけが目立つ街並み> (野澤 優)

広大な敷地に山のように積み重ねられた、除染土入りのフレコンバック、田畑や集落が跡形もなく押し流された大地にポツンと残った墓地等、今までテレビや新聞・雑誌等で何度となく目にした光景の中に、実際に足を降ろし、自分の目で確かめた経験は、私の記憶の中で忘れられないものとなりました。事故後6年も経ったのに、その間、直接的な被災地支援活動には、ほとんど参加していませんでした。周りではどんどん原発事故の記憶が風化していく現状に流されていく自分を感じ、このままではいけないという思いが募っていました。そんな時、このボランティア活動の事を知り、参加させていただきました。

測定作業で車を運転し、一緒に回ってくれた現地ボランティアの方たちは、津波で家族や知人を亡くし、事故直後には避難もされていた経験をお持ちでした。ただ時間が取れたからと参加した私と比べ、この活動に対する思いの深さは、とても比較にはならないものだと感じました。

測定作業終了後に回った、避難指示解除されて1週間たったばかりの浪江の町は、きれいに建て直された浪江駅、ほとんど明かりのついていない民家と、街灯や信号機の明かりばかりが目立つ街並みが、復興の現実を物語っていました。また、夕食時の歓談の中で聞いた、「放射線量分布図が『こんなに放射線量が減ったんだから、安心して帰ってきてください』として、国の帰還推進の宣伝に使われるのは本意ではない」との意見が印象に残りました。

放射線量測定作業は、今回で27次ということで、原発事故直後からずっと続けてこられたことにまず驚き、さらに、1986年のチェルノブイリ原発事故直後より、現地の救援活動を継続されている「チェルノブイリ救援・中部」のみなさんには、ただただ頭の下がる思いです。

具体的には何もしてこなかった自分が、情けないという思いでいっぱいになりました。今後も、機会があればまたこの活動に参加させていただきたいと思っています。



「南相馬の大地」から あなたへの贈りもの

2011年3月11日の東日本大震災に伴う原発事故で、多くの農地が放射能に汚染され、私たち農家は甚大な被害をこうむりました。しかし、事故発生からほどなくして、私たちは幸運にも「チェルノブイリ救援・中部」というNPOに出会いました。

彼らは、チェルノブイリ支援における農地再生事業の経験から、汚染地でナタネを栽培しても、ナタネ油は全く放射能に汚染されないことを発見していました。私たちは、このノウハウを学び、2013年から南相馬の汚染された農地で、菜の花の栽培を始めました。収穫したナタネ油は、直搾りで抗酸化作用があり、また、純国産品で遺伝子組み換え作物でもありません。そして、地元の農業高校生の協力を得て、「油菜(ゆな)ちゃん」と命名され、商品化されています。

私たちは皆さまに、この「天からの贈りもの」をお届けします。

フクシマのコミュニティの復興・再生を願って…。

福島県「南相馬農地再生協議会」一同



なたね油 油菜ちゃん



なのはなバーム(スキンクリーム)

New!!



油菜ちゃんドレッシング

New!!



油菜ちゃんマヨ

ご注文は、南相馬農地再生協議会 事務所へ

- ①お名前 ②〒と住所 ③電話番号
- ④商品名(規格)と数量

Fax またはメールでお願いします。

Fax : 0244-23-5611

Mail : minamisoma.nouchisaisei@gmail.com

ご注意！ 送料は別料金です。



「夏ギフト」準備できました！
同封のチラシをご覧ください。

	商品名	規格	価格(税込)
1		105g	¥ 540
2	「油菜ちゃん」	270g	¥ 1,080
3		810g	¥ 2,700
4	油菜ちゃんマヨ	170g	¥ 780
5	New!! 油菜ちゃんドレッシング	200ml	¥ 500
6	New!! なのはなバーム	10g	¥ 1,000

事務局便り

日々めまぐるしく時間が過ぎ、ついこの間まで肌寒いなぁと思っていたのに、もう真夏のような暑さがやってきました。事務局では、年度末の各種報告やら決算やらが終り、一息ついたかと思えば、総会に向けてまたバタついていきます。なんだかいつもバタついているのは気のせいでしょうか…。さて、今回は皆さまにひとつお願いがあります！ このたび、ポレーシェを読んでくださっている皆さまにアンケートを行うことに致しました。皆さまもご存じのとおり(?)、チェル救は財政危機にあります。今後の団体運営をよりよいものにしていくために、いつも応援してくださっている皆さまのご意見をお聞きしたいと思っております。皆さまお忙しいと思いますが、ぜひ同封したアンケートにご協力ください!! (兼松)

南相馬から「夏ギフト」の季節到来!!

2017年 春夏版 油菜ちゃん SUMMER Gift のお知らせ!

菜の花サミットで、颯爽とデビュー!!

高校生がレシピを開発!した新商品「油菜ちゃんドレッシング」と、「なのはなバーム (スキンクリーム)」が新たに仲間入りした、「油菜ちゃんフルセット (右写真)」が新登場!

他にも、油菜ちゃん三本セットをはじめ、バリエーションは6種類 (価格は 1,600 円~3,900 円/税込・送料別) に増えました。もちろん、単品箱買いもできますよ。

まだ「南相馬からの贈りもの」を手にしたことのないあなたのお知り合いやご友人に、夏のご挨拶はいかがですか?

(詳細は、同封のチラシをご覧ください。) 今年の夏は、ポレーシェ読者の皆さんで、ぜひ南相馬を応援してくださいね。 (美)



<油菜ちゃん フルセット>

¥3,600 (税込)

油菜ちゃん	270g	1本
油菜ちゃん ドレッシング	200ml	1本
油菜ちゃん マヨ	170g	1本
なのはなバーム		1個

編集後記

☆チェルQのHPのブログを、運営委員が持ち回りで担当することに。ところが「ブログって何?」と質問する人もいるわけで、前途多難です。でもときどき覗いてみてくださいね。 (佳)

☆「サミット in 南相馬」のお手伝いのため、名古屋から仙台までフェリーで移動して、南相馬に長期滞在しました。たくさんの方達と設営作業をしたり、当日は受付担当の方達と一緒に、あれこれと工夫したり…私が役に立ったかどうかは別にして、充実した楽しい数日でした、感謝。 (美)

☆「森友学園&加計学園疑惑」(=日本版「朴槿惠疑惑」)の国会追求が本格化し、「共謀罪(テロ等準備罪)新設」や「種子法廃止」「九条改憲」など、やりたい放題の現政権が窮地に追い込まれている。「メモや議事録は存在しない」「存在しないことの証明(悪魔の証明)は不可能だ」と強弁・詭弁を弄して開き直ってきた官僚・閣僚は、「総理のご意向文書は本物」という一言で、「存在しない」というウソがバレてしまった。「存在することの証明」は、正義感さえあればそれほど難しいことではないのだ。「共謀罪の成立」が先か? 「現政権の失脚」が先か? 政治家・官僚・ジャーナリスト・評論家・有識者・一般市民…、すべての日本国民の「良識」が試されている。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷 「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473